

古代にもあった関ヶ原の戦い 「壬申の乱」はこうして起きた (第3編)

前回までのあらすじ

なかのおおえの み こ
中大兄皇子(後の天智天皇)は、天皇家復権のため中臣鎌足はかと謀って当時専横を極めていた蘇我蝦夷、入鹿父子を誅殺した(乙巳の変)。その後も、蘇我氏に近い皇族をも謀略等でもって亡きものにした。蘇我氏以外の有力豪族に対しても、言いがかりやら、謀略によるデマを流し滅ぼしていった。このようにして、中大兄皇子は国政の決定権を掌握し権力を手にしていったのである。

しかし、弟である大海人皇子は内心批判的にみている。兄が天智天皇になり、中臣鎌足も亡くなった頃より、兄の政治に疑問を持ち始めていた。大海人皇子以外はイエスマン(自分の保身重視者)ばかりを重臣に置き、結果大海人が猛反対した白村江の戦いに大敗北をし、日本の国力は衰退していった。この頃から兄との政治路線の違いが少しずつ浮き彫りとなっ

ていった。また、天智天皇は本来自分の後継者は慣例(第一皇位継承者は兄弟)で大海人皇子が第一皇位継承者であることは認識していたが、卑母(母親が低い身分の出身)の子である長男大友皇子を次期天皇に据えるべく、大海人皇子を亡きものにしようと思った。しかしながら、この策略はそれまで中大兄の権力の握り方をつぶさに見てきた大海人にとって想定内というところであった。

そこで、先手を打って自分は「出家をしたい」と申し出てその場で髪を剃り、自分は吉野で隠遁生活を望んでいること、皇位など望んでいないことを申し上げた。そして、大友皇子こそが将来天皇に就くことがふさわしいと申し出たのである。

天智天皇もそこまで言われては、実弟をこの場で殺すことはできなかった。そして出家を許可した。

しかしながら、地方豪族にとっては大友皇子が将来天皇になることには納得いかなかった。このことについては、既刊の第1編、第2編をご参照願いたい。

1 戦闘の開始とこの後の展開

西暦672年6月27日、遂に大海人皇子は、自らの領国美濃国安八磨郡野上あまのちまぐんに立った。

《合力してきた豪族は、大海人皇子を正統な皇位継承者として大海人大王おおあまのおおきみと呼んだ。以降大海人側の人物の会話は、大海人大王と書くこととする。しかし、近江の大友側の人物にとっては、それは認めることはできないことであるため大海人皇子と表現することとした。》

大海人軍は東国の豪族を中心に、大海人大王に合力すべく日増しに兵が増えていった。3万5千は下らない兵で膨れ上がった。東国の兵は日頃、槍、弓矢の扱いを日常の鍛錬に組み入れており強靱な体格に武器の扱いの精度においては、西国の兵とは比較にならないほどの技能を持ち合わ

せていた。当時としては最強軍団を形成していた。

〈いざ、出陣〉

大海人大王は、全軍の前に立った。3万5千の兵は一斉に静まり返った。

「皆の者、遠路はるばるこの大海人のための合力ご苦労である！」

「おお〜」

まるで地鳴りでもきたかのような、兵たちの呼応である。大海人大王は、

「腐りきった今の近江朝を皆と共に倒し、ご政道を正そうではないか。兄、天智天皇は崩御され第一皇位継承者は、この大海人である。われわれは、正規軍として賊軍を倒さなければならない。この戦いには、必ずや神のご加護があろう。

このたび、この高市皇子たけちのみこに全軍の統帥権を与えた。この

高市皇子の指示はわしの指示と思ってもらいたい。そして、神武天皇以来の神々の御神託に込えようではないか」と大海人大王が言った途端、‘するとい稲妻’が伊吹山に向かって走った。

次に、高市皇子が皆の前に立ち、「わたしが、高市である。神武天皇のご出陣の折にもこのような‘するとい稲妻’があった。我々正規軍に、神武天皇やよろずの神々のご加護を賜った証拠である。これで賊軍である近江朝の兵が来襲しても神の霊力で敵を吹き飛ばしてくれるわ。一気に賊軍を倒そうぞ。よいか!」
「えいえいお～、えいえいお～」
と怒涛のごとく自然発生的に雄たけびが沸き起こった。

高市皇子は不破で軍議を開いた。戦略として軍の編成を4つに分けた。

①第一軍として近江路の東方主力軍

近江軍の主力部隊はまず、琵琶湖東の近江路を進軍して不破に攻め込む公算が高い。大海人軍の主力部隊の大將軍として、舎人出身で大海人大君の直参の豪族村国男依(各務原から江南を支配していた)を任命。その指揮下に將軍として、書根麻呂(注1)・和珥部君手(注2)・胆香瓦安倍(注3)・大分稚臣(注4)・朴井雄君(注5)大分恵尺(注6)の豪族をつけ、総勢2万人を従軍させた。美濃の精鋭部隊が中心である。この部隊が結果として連戦連勝。近江軍を殲滅させるのである。

②第二軍として、飛鳥古京の専守防衛軍

紀阿閉麻呂(注7)を將軍首座とし、多品治(注8)・置始兔(注9)・三輪子首(注10)・田中足麻呂(注11)を將軍とした。皆、伊勢と伊賀に精通している豪族である。この部隊には総勢8千の兵を従軍させた。

③第三軍として飛鳥で決起した大伴吹負を將軍首座として飛鳥古京の奪還と専守防衛を任務とした総勢1千これは、大伴氏の舎人が主力である。坂本財(注12)・鴨蝦夷(注13)・三輪高市麻呂(注14)が將軍となった。

④第四軍として琵琶湖西岸を進軍する西方軍

出雲伯(注15)・羽田矢国(注16)を將軍とし、総勢3千の兵を

付けた。先手必勝。各軍は、その日のうちにそれぞれの方面へ進軍していった。

次に、近江軍の軍編成を見てみよう。

①不破攻撃主力軍

大將軍に山部王(注17)が着任し、將軍に蘇我果安(注18)・巨勢人(注19)が着任した。兵力2万ではあるが、西国の豪族の合力があまり得られず、近畿地方より強制的に集められた農民兵も含まれていた。

②飛鳥古京襲撃軍

鸕岐韓国(注20)を將軍とする3千3百程の軍で、他に大野果安(注21)・犬養五十君(注22)・廬井鯨(注23)が將軍に就いた。

③近江朝防衛軍

蘇我赤兄(注24)・中臣金(注25)・智尊(注26)の7千ほどの兵力である。

④飛鳥留守司

高坂王(注27)がそのまま任命された。

壬申の乱 両陣営と主な戦場



2 大伴吹負の決起と大和戦線

少々後もどりするが、高坂王から駄鈴が借りられなかった。このことは、馬が調達できないということである。決して良い門出でないが大海人大王にとっては、想定内ではあった。吉野に隠棲した8ヶ月前から大分恵尺に「吉野から積殖山口までの徒歩と馬による所要時間」と「大津から積殖山口」までの馬（高市皇子には事前に大津皇子とその舎人の分と自分たちの分含めて極秘裏に馬の調達をしておくよう指示していた）と「吉野から積殖山口」による所要時間を正確に掴むよう指示してあった。したがって恵尺は数十回となく実際に歩いたり馬に乗ったりして、ほぼ正確な所要時間を掴んでいた。

恵尺は打ち合わせ通り、その足で近江の高市皇子に大海人大王の指示を伝えるべく近江に向かった。逢臣志摩は、大伴馬来田と吹負兄弟に決起させ、飛鳥古京に手中に治めよという大海人大王の指令を伝えるべく大伴氏の下に走った。これについては大海人大王との根回しは済んでおり、大伴兄弟も手ぐすねをひいて大海人皇子の指令を待っていた。

黄書造大伴は大海人皇子に、高坂王に駄鈴が拒絶されたこと、ほかの二人の舎人はお申しつけ通りに目的地に向かったことを報告した。大海人は不敵な笑みをうかべた。「よし、それでよい。讚良よ。今から吉野を出立する。皆のものをいまずぐ招集せよ」

もはや夜の9時を過ぎていた。

「いまから、出立して美濃のわが領地に向かう。残念だが馬は用意できなかった。したがって、夜陰に紛れての出立となった。はぐれないようこころして付いてまいれ」

讚良皇女とまだ幼い草壁皇子、忍壁皇子と女官、舎人を合わせても、30人足らずである。大海人大王はやるべき仕掛けはすべてやった、という満足感でいっぱいであった。

〈大伴氏の決起〉

一方、大伴兄弟は「待ってました」のごとく手勢6百で、

高坂王の守る飛鳥に攻め入った。不意を突かれた高坂王をはじめ守備兵は大混乱となり、取るものも取り敢えず逃げ惑う始末である。飛鳥には、近江軍の武器庫がある。この武器を手中にする必要があった。飛鳥が大伴に占拠されたとの報告を聞いた近江朝はすぐさま、大野果安を将軍に立て2千の兵をつけ、また、壹岐韓国に1千3百の兵をつけて飛鳥の奪還を図ろうと進軍してきた。

これに対して大伴吹負には5百程度の兵しか集まらなかった。到底勝てる戦ではなかった。しかし、吹負の決断は意外なものであった。

「皆の者、これから乃楽山（現在の奈良市の北部）で敵に攻撃を加えることとする」

将軍坂本財は、

「しかし、あまりにも兵力が違います。また、敵は二手に分かれて進軍しています。挟み撃ちにでもあったらわが方はひとたまりもありません」

吹負は、

「援軍は必ず到着するはずだ。地の利はこちらにある。援軍が到着するまで持ちこたえるのだ」

しかし、将軍たちには良い策は浮かばなかった。そこで吹負は、

「よいか皆の者、大伴氏は古来より朝廷を護衛する武人の家柄である。ここで引き下がっては大伴の面子にかかわる。俺は一人でも踏みとどまり戦う覚悟だ」

と言うと、将軍たちは吹負の決意に感動した。しかし軍議の具体的戦術には紛糾した。三輪高市麻呂は、

「ここは、正面突破を敢行し敵に一泡喰らわしてやりましょう」

と強硬論を主張した。しかし荒田赤麻呂が、

「みなさん、もっと冷静になってください。ここで大伴が負けたらせっかく占拠した飛鳥が、敵の手に落ちてしまいます。それでは元も子もありません」

赤麻呂や高市麻呂両方の言い分にはそれぞれ一理あった。そこで吹負は、

「赤麻呂が言うように飛鳥を失ったのでは、大海人大王にわしが合わせる顔がない。しかし、高市麻呂の言うように、敵を前にして一歩も退くことはできぬ。そこでだ。赤麻呂は

ただちに忌部首子いみべのおびと人と飛鳥に帰り、すみやかに兵を集め防衛態勢を整えよ。しかし、お前にあたえる兵はない。自らの力で防衛軍を組織するのだ。よいか!」

赤麻呂は一瞬動揺した顔つきとなったが、確かにここはやるしかないのである。

「かしこまりました」

「我々は、必ず勝つ」

と吹負は自分に言い聞かせるように叫んだ。赤麻呂は、もはや飛鳥には老人、女人、子供しか残っていないことは判っていた。そこで、彼は考えた。

“そうだ! 橋の板やどぶ板をすべて剥がして、飛鳥の周囲に楯が立ち並んでいるような防衛ラインをつくろう。それを軍勢に見せかけるのだ。これなら、女、子供でもできるではないか”と思いついたのである。

これが、後に敵将、大野果安おおのはたやすの判断を狂わせることになろうとは、誰もこの時は思いも寄らなかった。赤麻呂だけは、この板が並んだ様子を楯と見間違えられ、敵将が伏兵の存在があるかのように誤判断してくれることに賭けていた。

〈大伴軍と近江軍の決戦〉

吹負軍と近江軍との決戦日は、7月4日早朝である。朝から濃い霧が立ち込めていた。吹負は当麻まとう辺りを主戦場として選んだ。吹負は5百の兵を二手にわけた。「当麻ちまたの衢」あしには、葦ひその茂みがあり潜むのには好適地なのである。第1隊は吹負將軍を指揮官として3百。敵は奈良街道を進軍してきているので、街道を挟んで対面に三輪高市麻呂を指揮官とし、騎馬隊を主体に2百の兵を第2隊とした。この辺りは葦と沼地になっており、慣れない近江軍は方向性を失い指揮系統が行き届かず、組織立って動けない地形である。三輪高市麻呂は近江軍の隊列の中心部を騎馬隊で突進し隊列の攪乱をした。近江軍が「当麻の衢」方面に逃げてきたところへ吹負3百の兵で挟み撃ちし、敵将大野果安と

壱岐韓国を目掛けて攻撃を加える戦術である。

しかし、近江軍の精鋭部隊は6倍の兵力であり、さすがの大伴軍もかなわなかった。前半は近江軍も混乱し大伴軍が優勢であったが、近江軍が隊形を建て直し一気に攻勢に転じてから大伴軍はじりじり追いつめられた。しかたなく吹負も供のもの一人となり、畝傍山うねびやま方面に逃走した。

大海人軍の大將軍、紀阿閉麻呂は大伴吹負の敗戦を斥候から聞き、騎馬隊2千を至急置始兔に命じて大伴の救援に向かわせた。

一方、近江軍の大野果安と壱岐韓国は、大伴氏のことである、必ずや何か伏兵を潜ましているだろうと、ゆっくりと用心深く飛鳥に進軍していた。そして、天香具山あまのかぐやままで来て、大野果安は驚いた。飛鳥古京の辺り一面に楯が立ち並んでいるのではないかと。果安は、

「どうもおかしい。あの武勇で鳴らした大伴一族のことである。このまま、引き下がるとも思えない。ましてや、静かすぎるし、撤退ならば民家も焼いていくはずである。その気配もないところを見ると、我々に攻めさせて伏兵でも潜ましている、一気にわれわれを殲滅する作戦にちがいない。壱岐韓国將軍は、いかが思われる」

壱岐韓国も、

「大伴吹負という男をよく知っておりますが、策謀たには長けております。先方の様子から判断して、かならずやなんらかの策略がございましょう」



▲「壬申の乱」戦いのジオラマ(写真提供:奈良文化財研究所)

「お前もそう思うか。ここは一旦撤退して兵の温存を図るべきかもしれん。昨日、不破の大海人軍の本隊がすでに琵琶湖を南下しはじめたとの報告があった。これから大海人軍の本隊と戦わなければならぬ。兵の温存のためにも近江へ一旦撤退しよう」

近江軍は天香具山で進軍をやめ、撤退したのである。これこそが、吹負の家来の荒田赤麻呂の心理戦の勝利である。実際攻められたら一時も持ちこたえず飛鳥の民衆は皆殺しにあってにちがいない。肝心の大伴吹負自身も、伊賀方面へ逃走していたため、伏兵など一人もいないのが実際のところであった。

〈飛鳥の救援〉

大伴吹負が伊賀に逃走中、先方からおびたしい馬の蹄と嘶きが聞こえた。すでに近江軍の手が回ったかと思い、茂みに隠れた。ところが運の悪いことに近くで休息を取り出したではないか。

吹負と供の者も、“まずいなあ”と思い、息を潜めていた。そしたら、どうも聞きなれた声があるではないか。吹負は“あつ、置始兔の声に似ている”と思ったので、茂みからそつと覗くとまさに置始兔その者であった。近江朝では親しい仲間であった。大伴吹負は“助かった”と思った。吹負は、「おい!置始兔どの!」

大声で叫んだ。
「おお〜、吹負殿ではないか。今、おぬしらの救援に駆けつけるところぞ!何じゃ、その服装はぼろぼろではないか」
たしかに、命からがらで逃げてきたからである。吹負は、「まず、飯を食わせろ。兔!」

吹負は飯を食いながら、今までの一連の経緯を話した。置始兔にも、戦況の詳細が掴めた。吹負は、「わしと一緒に飛鳥にいってくれ。今頃は近江軍に占拠されているかもしれない。あそこには近江軍の武器庫がある。あれを奪われたら、わしは大海人大王に合わせる顔がない。急ごう!」
「おいおい、おまえが飯を食っていたから遅れたのではないか?」

「わはははは〜」

と笑いながらも既に吹負は馬上の人になっていた。

騎馬隊なので、半時ばかり走って飛鳥の近くに着いた。そつと山から飛鳥を見て吹負は驚いた。近江軍がいないではないか。それに、荒田赤麻呂も忌部首子人の姿も見えるではないか。すぐさま飛鳥に入り、近江軍が引き上げた事情を知った。

「赤麻呂、よくぞ良い考えを思いついたものだ。大手柄であるぞ」

吹負は赤麻呂の手をしっかりと握って褒め称えた。

「皆の者、さつそく大伴軍の生き残りを集めよ。近江軍はまだ遠くには行ってないはずだ。のろしを上げて兵を集めよ。追撃するのだ」

半時もしないうちに、隠れ潜んでいた大伴の家来が続々と集まってきた。その中には、坂本財や三輪高市麻呂もいた。「親方様、ご無事でなによりでございます」

吹負は、

「大海人軍の加勢がきた。すぐさま身支度し飯を食ったらすぐ出撃する。よいか!」

置始兔は、さすが当時最強と云われた武人の家柄の家来たちだと感心していたら、吹負は、

「兔の騎馬隊2千。おれに預けてくれ」

兔は“おいおい”と思ったが、地理勘はある相手だし、吹負

なら同意した。大伴軍1百、置始兔の騎馬隊2千の兵力でありこちらは、騎馬軍団であるがゆえ圧倒的に有利である。

大伴吹負は当麻で大野果安と壱岐韓国の軍勢をとらえた。大野も壱岐も予期もしない騎馬軍団が後ろから襲い掛かってきたのである。陣形をとる間もなく騎馬軍団に蹴散らされてしまった。吹負の配下に来目という



▲飛鳥時代の武装と武器
(写真提供:奈良文化財研究所)

勇敢な男がおり、執拗に大野果安と戦ったが、果安も息絶え絶えで逃げ、近江朝に戻った。一方、壱岐は果敢に戦ったけれども切り殺されてしまった。近江朝としては手痛い敗北となった。

その後は、近江軍の将軍を変え、いぬかいのむらじいきみ犬養連五十君をもって再度攻撃してきた。しかし、紀阿閉麻呂の本隊が到着し、紀阿閉麻呂と大伴吹負と置始兔による鉄壁の布陣に近江朝は飛鳥の攻略を諦めることに決めたのである。

3 近江戦線とその展開

一方の7月1日、大海人軍主力部隊は和わ豊とよヶ原がはら（関ヶ原）にあって、明朝の出陣を控えて数万の人馬で埋め尽くされていた。

むらくにのおより村国男依はなかなか寝つかれずにいた。そこで、少し涼みに出ることにした。空は満天の星で美しい光景を見せてくれていた。美濃の空といい、空気といい、景色すべてが、男依はとても好きであった。独り座って空を眺めていると、これまでの人生のいろんな一コマ、一コマが浮かんできた。大海人大王にお仕えして本当によかったと思っている。俺は明日にも死ぬかもしれない。でも大海人大王のためならば後悔はなかった。大変高貴なお方なのに、舍人としてではなく、兄弟のごとくわれわれに接してくれた。一緒に戯れ、酒を飲み、野駈けもたのしかった。おれはいつ死んでも悔いはないと、つい感傷的になっていた。

大海人軍には、讚良皇后（皆勝利を確信して、みこ皇女をこうこう皇后と呼んでいた。後の持統天皇）とその采女が染め上げた赤い鉢巻と幟が、和豊ヶ原（関ヶ原）にたなびいていた。それも3万5千という兵である。おのずと血潮がみなぎってくるのを感じていた。

朝、男依は3万5千の大海人軍の集団の前方の中央の高台にいた。その横に各将軍が並んでいた。3万5千の兵は水を打ったように静まりかえっている。むらくにのむらじおより だいしよくん村国連男依大將軍は一步進み出た。

「いよいよ近江軍と雌雄を決するときが来た。敵の先鋒は玉倉部に駐屯している。その数5百。わが軍は出雲伯將軍

を先鋒として殲滅する予定である」

この伯は巨漢で、男依の直属の部下である。伯が日頃から兵を鍛え上げてきた精鋭部隊を率いている。男依は、「先鋒は、お前に任せる。どうだ、いけそうか」

「一瞬のうちに蹴散らしてみせます」

伯はちょっとおどけた言い方をしたので、場はどっと笑いに包まれ、緊張が解けた。

〈玉倉部の戦い〉

出雲伯の先遣部隊1千は赤い布の幟と鉢巻をして出陣した。藤古川を渡ると、伊吹山が雄大な姿を右手に現わす。間の者が戻ってきた。敵は近い。こちらの動きにぜんぜん気づかない様子で、休息をとっていた。伯は1千を二手に分け、迂回して両側から挟み撃ちする戦法をとった。

「静かに、声を殺してゆけ！突撃のとき、鐘や太鼓を鳴らしていっせいに喚声をあげるのだ」

と一方の指揮官に命じた。注意して聞けば、夏草を踏み分ける音が聞こえるはずだが、かまびすしいほどの蟬の声に紛れて敵は気がつかないらしい。迂回したところで伯は、「突撃!!」

と叫んだ。不意をつかれた敵は、動転して右往左往の大混乱になり、悲鳴を上げて逃げ出したのである。切り倒された兵のほとんどが、赤い布をつけていない兵ばかりであった。

戦いは短時間で終わった。部下が敵の隊長を捕らえて、こま伯の前に連行してきた。足に少し傷を負っているようである。すぐさま、敵の隊長に対する訊問がはじまった。

「お前たちの本隊はどこだ？」

はじめは口を開かなかったが、だんだんきびしく追及されてぼつりぼつりと話し始めた。

「お前たちの本隊はどこだ？」

「犬上川をめざして進撃中だ」

「大將は誰だ？」

「詳しくは知らん」

「そんなはずはないだろう。仮にもお前は先遣隊長だ。知らぬはずはなからう」

伯は、

「こやつを殺せ!」

と部下に命令した。さすがの敵の隊長も、狼の迫力で本当に殺されると思ったのであろう。

「わかったから、命だけは助けてくれ」

と懇願してきた。それからはすらすら話し始めた。

「大將は誰だ? う〜ん?」

「山部王だ。副將が蘇我果安と巨勢人だ」

果安も巨勢も御史大夫である。山部は皇族である。まさしく近江軍の正規主力部隊である。

「兵力は如何ほどだ?」

「ほぼ2万と聞いている」

「布陣はどのようにして、進軍しているのだ。う〜ん言わぬか。殺すぞ!」

「中央軍1万を山部王が、2軍として蘇我果安5千、3軍が巨勢で5千だ」

狼はすぐさま本隊に戻り、高市皇子の大統帥と男依大將軍に報告した。男依は狼の功績を褒めた。

「よくやった狼。大手柄、大手柄」

高市大統帥も狼の手を取って感謝の意を伝えた。高市皇子は男依に、

「近江軍はこちらの想定より速い動きをしておるなあ」

「さっそく我が本隊も犬上川に向けて進軍しませんと…」

大海人軍は、すぐさま進軍を始めた。

〈近江軍の対応〉

一方、玉倉部の結果は伝令によってすぐさま近江軍の本隊に届いた。

「申し上げます。玉倉部に向かった先遣隊は全滅したとのことでございます」

蘇我果安は、

「何! 全滅だと。隊長はどうした?」

「捕らえられました」

さっそく軍議が開かれた。山部王は強硬論を吐いた。

「このまま、大海人軍に勢いづけさせれば、静観している豪族がぞくぞくと大海人軍に味方しよう。ここは一気に本隊に攻撃をしかけよう」

果安は、

「まずここで相手の兵力など情報を集めた方が、得策ではないか? こちらは、大海人軍の兵力さえ掴んでないのだから」

巨勢も、

「山部王の言う相手の勢いを封じるのも手ではあるが、まず相手の状態の情報収集が先だと思うが…」

山部王は憤慨した。

「おまえらは腰抜けか! ならばわしひとりでもすぐさま進軍する」

果安は、

「まあ、山部王様落ち着きなされ。わしも少し頭を冷やしてくる」と言って幕舎から出た。果安には別の思惑があったのである。近江を出立するとき蘇我赤兄から、

「山部王は大海人皇子にたいへん好意をもっている。お前はしっかり山部王を監視し、敵に寝返るふりを見せないか監視せよ。いざという時はよいな」と言い含められていたのだ。山部王は大海人軍に寝返る機会を狙っているのではないか。だから、一人でも出撃しようとしているのではなからうか、と考えていた。

そこへ巨勢がやってきた。果安は巨勢に自分の考えを率直に話した。巨勢も初めは「まさか」と思ったが、ここで山部王に1万もの大軍で寝返られたら、近江軍の劣勢はまちがいない。迷うところである。巨勢は果安に山部王をここで殺そうと持ちかけた。

「よし、やろう」と果安も同意した。ここで大事件が起こったのである。果安と巨勢は幕舎に帰るなり、山部王に斬りかかったのである。

「おまえら、血迷ったか。どういうつもりだ!」

「申し訳ございません。山部王にここで寝返られたならば、近江軍は大打撃でございます」

山部王は息絶え絶えに

「おまえらこそ獅子身中の虫ぞ」

と言って、絶命した。近江軍の司令官が身内に殺されたのである。近江軍の動揺は計りしれなかった。このような事態が、兵の逃亡、將軍の寝返りを誘発することは予想できたはずであったが、文官である果安と巨勢には、経験不足であった。

近江軍の進軍は止まった。果安はひとまず蘇我赤兄そがのあかえに報告すべく、近江朝のある大津に戻った。蘇我赤兄は、「何！山部王を暗殺しただと。ばか者。仮にも山部王は皇族ぞ。近江軍に皇族がいなくなった主力部隊が、皇族部隊である大海人皇子と高市皇子の軍隊と戦うということが、どういうことかわかっての所業か。どうみても我らが賊軍になってしまったことになるではないか」

「赤兄様はわたしがここを出発するとき、山部王を監視し、裏切る予兆があれば殺せとご命じになったではございせんか」

「監視せよとはいったが、独断で山部王を殺せとは命令しておらぬ。また大海人軍の主力部隊が犬上川に向かって進軍してきているというのに、将軍のお前がなぜ、のこのこ帰ってきた？ばか者。お前の将軍職を解任する」

果安はもう自分がどうしていいものやら、わからなくなっていた。「わたしは重大な失態をしてしまった。このままのめめと帰れない」

果安は放心状態で“赤兄にはめられた”と思った。自宅に戻ると、責任をとって自害した。

一方、鳥籠山とこやま(現在の犬上川にあたる)まで進軍していた近江軍は、進軍が止まり混乱していた。山部王と蘇我果安の軍のナンバー1・2が死んだのである。兵の動揺は日増しに増え続け、逃亡や味方していた豪族の戦線離脱が相ついだ。もう、軍としての士気・命令系統もなくなり、自然と内部崩壊していった。

大海人軍の最高指揮官である高市皇子は、問者や近江軍より寝返ってきた豪族から詳細を聞いた。高市皇子は、「男依大將軍、今後、わが軍はいかがする」

男依は、

「一日も早く近江朝を倒さねばなりません。近江朝のある大津へ進軍しましょう」

〈倉歴の戦い〉

近江軍の将軍に田邊小隅たなへのおすみがいた。このまま一戦もせず退却することに腹が立っていた。彼の手勢は1千である。正面の大海人本隊に攻撃をしかけるのは無謀すぎる。

そこで、鈴鹿から伊賀に進軍していた。折から大海人第二軍、紀阿閉麻呂が大伴吹負救援のため飛鳥に進軍中である。倉歴には国境重要地点として鈴鹿峠を守る田中臣足麻呂の1千の兵が駐屯していた。小隅は敵の補給路を寸断することを考えていた。

「みなもの者、よいか良く聴け。今から倉歴に向かう。そこには大海人軍の田中足麻呂が鈴鹿峠をおよそ1千で守っている。これに夜襲を掛ける」

小隅は全軍に声を出すことを禁じ、旗を巻き太鼓を布で包んで進軍した。夜襲なので、小隅は敵味方を見分けるため‘合言葉’を「山」と決め言われたら「川」と答えよと徹底させた。

夜半、小隅は突撃命令を出し、ドラや太鼓を打ち鳴らし大声で突撃した。足麻呂軍は完全に虚を突かれて混乱に陥った。小隅隊は合言葉を使い、返事のない者は片っ端から斬り倒していった。足麻呂も部下に守られ辛うじて敵に撃たれずにいた。薊野たらののに駐屯している多品治おおのほんじは、3千の兵で駐屯しているはずである。足麻呂は部下に薊野に退却を命じた。足麻呂の部下のうち多品治の下に帰れたのは2百あまりで、大敗北であった。

「多品治、すまぬ。油断しておった。夜に奇襲でもってやられてしまった」

多品治は、鷹揚な男である。

「心配するな。仇はおれがとってやる」

「小隅はこちらにくるだろうか」

「必ず来る。次は昼の戦いになるだろうから、昨夜のようなことはできまい。まあ休め。お前の出番はちゃんと作ってやるから、小隅がくるまで眠るが良い」

「誠にかたじけない。この恩はいつか返えさせてもらうから…」
慎重な多品治は、問者を放って小隅の兵は1千程と掴んでいた。

倉歴から薊野までは、一本道である。待ち構えていた品治軍は敵を充分引きつけて、一斉に矢の雨を降らせた。小隅隊も奇襲で大混乱となった。多品治はそこへ騎馬隊を出撃させた。休養十分な足麻呂の兵も、昨夜の仇討ちとばかりに斬りまくった。大勝利である。小隅も死に、百人足らずの敗残兵は、近江へばらばらに逃げていった。

山部王と蘇我果安の2将軍を失った近江軍には、後任さかいへのむらじくすりに境部連葉(注28)が任命された。巨勢は山部王殺害の罪は免れないところであるが、近江軍には巨勢に替わる人材がおらず、そのまま、将軍として戦うことになった。近江主力軍は、瓦解しなかった軍を境部連葉が立て直し5千程の兵は減ったものの、陣形を建て直し犬上川より前進し息長横河あたりまで進軍した。

大海人軍の高市皇子は、大將軍村国男依に戦略会議を開くので将軍たちを集めるよう命じた。男依は、「明朝を期して正面の敵に一斉攻撃をかける。そこで攻撃隊型だが、全軍を3つに分けることとする。敵は1万5千である。まず、敵は一丸となって高市皇子の旗艦部隊目掛けて攻撃しかけてくるに違いない。そこで、その前線に中央本隊を置く。その隊長わにべのきみてに和珥部君手、お前に託す」男依と君手は俺、お前の仲だが今は大將軍男依である。和珥部もけじめは心得ていた。「左翼部隊隊長は書首根麻呂、お前だ。右翼部隊の隊長は胆香瓦安倍に託す」

「御意」

と三人の将軍は緊張した面持ちで頭を下げた。「こちらは兵も増えて3万9千である。右翼と左翼に1万ずつを与える。そして、右翼、左翼は騎馬隊を主体に構成し、両面から近江軍を攪乱し、相手に前方に突撃をさせてはならぬ。こちらから先制攻撃を掛け、近江軍に隊形を取らしてはならぬ。よいか」

書も胆香瓦も神妙に聞いていた。

「そして中央本隊は、こちらの右翼と左翼が攪乱し混戦になるまで、絶対に撃って出てはならぬ。充分くさび楔を打ち込んだところで、はじめて攻撃しとどめをさせ。君手よいな」

将軍たちは男依がこのような戦術を持っていることに正直驚いていた。右翼の胆香瓦も左翼の書も深夜を見計らって、音も立てずに近江軍に対して配置についた。

夜明けとともに、大海人軍の右翼と左翼の騎馬軍団が一斉に喚声をあげて突撃をした。赤い幟を掲げ鉢巻をした大海人軍は、近江軍の先陣を突破した。しかし、後方から新手の近江軍が攻撃をしかけてきた。その数8千ほどで

あろうか。大海人軍の右翼軍も左翼軍も一進一退となり混戦模様になってきた。この時である。

男依は中央本隊の騎馬軍団に、近江軍を迂回して背後にまわり後方から攻撃をかけよと命じた。近江軍は、四方八方を囲まれるかたちになってしまった。ここで、中央本隊の美濃の野戦最強精鋭部隊である君手軍に出撃命令が下った。

これで近江軍は総崩れである。退却というものではなく、散り散りになって逃げ出したのである。男依は騎馬軍団に、

「直ちに追撃しろ。敵の将軍、境部連葉をなんとしてでも捕らえよ。雑魚はほっておけ」

と騎馬隊長に命じた。これで近江主力精鋭部隊は壊滅した。高市皇子と男依は「勝った、勝った」と子供のようにはしゃいで喜んだ。

一時間ほどして近江の大將、葉(くすり)が連行されてきた。男依が、

「葉。お前、俺の顔を覚えておるか」

「お前なぞ、知らん」

「わしは大海人大王の舎人だまむほんをしていた男依だ。蘇我赤兄とお前が有馬皇子を騙して謀反の罪の汚名を着せて殺しただろう。そして、お前は見せ掛けの流罪で、すぐ赦免されたな」

葉は顔色を変えた。

「おれは、ぜったいにお前を許さない。人間としても最低なやつ。死んでもらう」

男依は狼をいつも護身用に連れていた。そして、男依が狼に「喰い殺せ」と命じると5匹の狼は縛られている葉に襲いかかった。葉は20分ぐらい全身血だらけになり、大声で叫び苦しみながら全身を分断されて絶命した。

「これから大津まで進軍する。一気に近江朝を滅ぼすのだ」大海人軍の大勝利である。大海人軍の勝利は明明白白である。人間、ゲンキンなものである。続々と近隣の豪族が加わってきた。

第4編は、最終決戦、瀬田橋の攻防からはじめたい。ご期待を乞う！

- (注1) 書氏は、中国前漢の高祖(劉邦)の子孫で、応神天皇(15代)の時來朝。文官として倭国に文化を伝承した。孫子の兵法等も一部ではあるが、心得ていたものといわれている。
- (注2) 大海人皇子の舎人で、美濃北部を支配する豪族である。村国男依と身毛広と大海人皇子が吉野に隠棲したあとも、大海人の指令で極秘裏に美濃・尾張・信濃を回り根回しをした功績は大きい。
- (注3) 元々は、高市皇子の舎人で近江の豪族と云われている。近江の地理にくわしいということで、主力部隊の将軍に抜擢された。
- (注4) 元々は、大分県の豪族である。この時は王宮の警護の兵衛府に勤務していた。武人としては優秀であった。壬申の乱のおり大海人皇子の長男大津皇子の警護で大海人軍に入り、壬申の乱の最終戦で先鋒として軍功があったとされている。
- (注5) 美濃に住む物部氏の一族。大海人皇子の舎人として終始護衛にあたった。かれの情報により大海人皇子は、迅速に吉野を脱出できた。
- (注6) 元々は豊後国大分県の豪族であり、大分国造家である。大海人皇子の忠実な舎人の一人。高市皇子と大津皇子を近江より脱出させ、伊賀積殖で大海人皇子と合流させる大技をなした。これは、彼が幾度となく歩いてお互いの行程を測った功績である。1400年前である。時計もない時代に途中で寸分の違いなく合流できたことは、奇跡としかいいようのない偉業である。
- (注7) 紀氏は、古代の有力豪族で伊勢、伊賀を支配下に治め彼の合力が大海人皇子を無事通過せしめたことによると思われる。日本書紀の編者は「東道將軍」と軍の首座に据えており身分の高さをあらわしている。
- (注8) 安八磨郡の湯沐令(皇子の生計を支えるために設定された管理職)である。武人としても優れ、また皇子の生計を支えるための領国で活躍した有力豪族であった。脾田阿礼の覚えを書き写し編纂した太安麻呂は彼の息子と云われている。
- (注9) 美濃国の豪族。武勇に優れ、村国男依に引けをとらない武人。大海人の舎人。
- (注10) 伊勢の豪族。大海人皇子の伊勢・伊賀を無事通過すべく警護し、自らの兵500人で大海人皇子に味方した。
- (注11) 蘇我氏の一族。伊勢国の湯沐令。大海人皇子の舎人として終始警護にあたり、壬申の乱で功績があった。
- (注12) 和泉国の豪族。大伴吹負に従い大和戦線を戦った。勇猛な武人。
- (注13) 大和の豪族。大伴吹負の決起に賛同し自らの兵を連れて、大和戦線を戦った。
- (注14) 奈良盆地の三輪山麓を本拠とする豪族。大伴吹負の決起に賛同し大和戦線を戦う。
- (注15) 近江の豪族。近江軍が精鋭を密かに高市皇子の本営のある玉倉部邑を突いた際、果敢に近江軍を撃破し近江軍の戦力の弱体化させた。勇猛果敢な武人である。
- (注16) 壬申の乱の勃発時は近江軍の将軍であった。途中近江主力軍内で司令官山部王が蘇我果安に暗殺される内紛があり、近江軍に見切りをつけ大海人皇子に寝返った。その後、天武天皇

の忠臣として天武朝を支えた。

- (注17) 舒明天皇につながる皇族。近江軍の旗頭に据えられた。犬上川のとりに陣を敷いていたが、大海人軍には勝てないと判断し投降を提案したが、蘇我果安と巨勢人に殺された。この事件をめぐって近江軍はなだれのごとく崩壊の道を歩むこととなった。
- (注18) 蘇我馬子の孫にあたり、赤兄の弟。御史大夫。山部王を陣中で殺害。近江朝に帰り自害。
- (注19) 飛鳥時代の有力豪族。御史大夫。壬申の乱後一族島流しとなり、その後の記録がない。
- (注20) 河内国で大伴吹負と戦い勝利したが、大海人軍の援軍が到着。交戦し敗死。
- (注21) 河内国で大伴吹負に勝ったが、飛鳥古京まで奪還できなかった。乱後許され天武天皇・持統天皇の忠臣として仕えた。
- (注22) 大野果安に替わって大和戦線の将軍として、大海人軍をくるしめた。最期は瀬田の敗戦で捕まり斬首。
- (注23) 近江国草津の豪族。大伴吹負に破れ敗走。その後の記録がない。
- (注24) 天智天皇に仕え、いろんな謀略の実行犯。その功により左大臣として実権を握る。奸臣の典型といわれている。せめて、中臣鎌足の10分1でも賢なところがあれば近江朝は続いたであろう。壬申の乱後一族郎党島に配流。この後の記録なし。
- (注25) 中臣鎌足のいとこ。右大臣。壬申の乱後逃亡し、浅井郡で切り殺される。子孫は流罪。
- (注26) 近江軍の将軍。出自不明。渡来人。瀬田の戦いで獅子奮迅の戦いぶりをして最期は斬り殺された。
- (注27) 飛鳥古京の留守司。大海人皇子には表立って協力はしなかったが、大海人皇子の吉野脱出したことの報告を近江朝に対して遅らせている。
- (注28) 有間皇子の謀反に、蘇我赤兄とともに加担して流罪になっていた。この後赦免され近江軍に加わった。

参考文献

- 「壬申の乱を歩く」 倉本一宏著 吉川弘文館
「壬申の乱」 倉本一宏著 吉川弘文館
「美濃路燃ゆ」 渡辺 孝著 文溪堂
「白鳳の嵐」 町田俊子著 幻冬舎ルネッサンス
「敵みたる虎が吼ゆると」 三浦 昇 実業之日本社

(2013.11.20) 共立総合研究所 特命研究員 三矢 昭夫